

「全員一致」「全員参加」の幻想  
スリーピングメンバーと窓際族  
アリの群に学ぶ  
全員が同じでないメリット  
選択科目のルール  
クラブの中に小さな嵐を

2010年12月18日 東日本区1998~2011 ヒストリアン 吉田 明弘

## スリーピングメンバーと窓際族

数年前、あるクラブの例会に出席しました。席上、スリーピングメンバーが話題になったので、随分、思い切ったことが例会の話題になるものだと、驚きました。

最近、何気なく、名古屋プラザクラブの国際加盟認証状伝達式のプログラム冊子を見ていたら、設立経過にスポンサークラブである名古屋東海クラブの「窓際族対策」という言葉があり、目が釘付けになりました。クラブ内で出番が少なくなったメンバーのために新たなクラブをつくらうという発想だったのです。さすが、＜本音で語る東海クラブだな＞と思いました。

「スリーピングメンバー」と「窓際族」では、その意味するところは違うのですが、その時々クラブの中核で活躍している人たちにとっては、どちらも気になる存在なのでしょう。

## 例会出席率 100%の快感

実は、私の属している東京西クラブは、長年、例会出席率が 50~80%くらいでした。チャーターナイト以来、一度も姿を現わさないメンバーもいました。それが、突然、出席率が向上して、100%出席の月もあるようになりました。

ある月、区から届いたばかりのロースターをメンバー数だけ抱えて例会に出ました。欠席が多いと、持ち帰るのが本当に惨しいのです。受付でメンバーに配り、例会後に残った分を持って帰ろうとしたら、全部なくなっていて、100%出席って、こんなに気持ちが良いものかと感激したことがあります。

## アリの群れに学ぶ

夏のカンカン照りの昼下がり、アリの群れが、地面一面に広がっていました。見ると、他の虫の死骸を巣穴に運ぼうとしているのです。でも、自分たちの数倍も大きい獲物を運ぼうと力を合わせているのは、10匹ほど。あとは、素知らぬ顔で、歩きまわったり、立ち話をしているのです。

観察しているうちに腹が立ってきて、意見のひとつも言いたくなりました。

「お前さん、言いたくはないけど、仲間があんなに苦勞としているのに、なんで手伝おうとしないんだ。さっきから見れば、首を振りながら歩きまわったり、おしゃべりしているだけじゃないか。いいからだをしてるんだから、交代しようとしても言ったらどうなんだ。」

そうだ、働き者ばかり集めて、精鋭の群れを作ったら、どんなにすっきりするだろうか、と思った瞬間、そうしても、また働くものと、働かないものが出てしまうのではないかと、集団の全員が、同じに働けるようには出来ていないのではないかと思います。

これは、私の直感でしたが、昨年日本動物行動学会で、同じような研究報告があり、新聞で「怠けアリでも役目あり」と報道されました。記事によりますと、アリを、「よく働くアリ」と「ほとんど働かないアリ」に分けて、それぞれの集団を作り直しても、一定の割合で「働きアリ」と「怠けアリ」に分かれるのだそうです。そして、「働きアリ」にも休む時があり、「ほとんど働かないアリ」の存在が、集団全体が死滅することを防ぐ仕組みとなっている可能性があるのだそうです。

## 全員一致の幻想

今年、大きな事故に遭遇したグループが、優れたリーダーのもと、全員が心を合わせ、奇跡的に生還したニュースに感動しました。また、プロ野球でも、「全員一致の勝利」が報じられました。

このことには、私たちもそうありたいと憧れをもつのですが、「全員一致」や「全員参加」を、私たちのクラブ活動に持ち込むのは無理がある、むしろ持ち込んではいけない場合があると思っています。

その理由は次のとおりです。

まず、クラブは、極限、あるいは追い詰められた状態で活動していないこと。そしてクラブ活動は、短期勝負ではないということです。むしろ平時が原則で、人生と重なり合うほどの長い期間の活動ですから、「全員一致」や「全員参加」を持続することは難しいように思えるのです。

次に、メンバーがさまざまだということ。むしろ自分とは異なった人に加わってもらおうとしているわけですから、それぞれが背負っている背景や、人生において立っている場面が異なっているのです。アリには、義理とか、メンツとか、反発、義侠心、付き合い心などないでしょう。人には、意志があり感情があり、物事の判断基準が複雑なのです。

さらには、クラブに所属している動機や、意識が人によって、まったく違います。

また、クラブも生き物ですから、活動内容が一定ではなく、長い期間においては、随分、変化をしているのです。「全員一致」や「全員参加」を前提にすると、新しいプログラムや、魅力ある活動は生まれてきにくいのです。

そして、私たちはアリではありませんが、自分たちの中で、働く場面と、働かなくてよい場面を、本能的に嗅ぎわけているところがあります。わが身を振り返れば、よく分かります。自分の意志で入った会や参加したグループであって、そこにいる人は善い人ばかりなのに、なかなか活動に溶け込めないことがあります。まあ、うまく進んでい

るのだから、自分が手や口を出さない方がいいだろうと思うこともあります。

反対に、たとえばバザーの準備などで、「ちょっとだけ手伝っていくよ」と言いながら、最後まで居残って、拳句の果てに、ご苦労さん会まで取り仕切ってしまうこともあります。これがどうしてなのか、自分でも説明が付きません。

## 全員が同じではないメリット

クラブ活動には、人と人とのぶつかり合いを楽しむところがあります。適度の期待感と失望感を互いに感じ合うことにも、それなりの意味があるように思います。

しかし、「全員一致」や「全員参加」を意識し過ぎると、わだかまりや気まずさ、気遅れを生むことが多いのです。

メンバーが増えると、そのニーズに応えるには、プログラムに多様性が求められます。それには好き嫌い、向き不向きがあります。全員が全部に参加することはできないのです。最初から、そのことについてこられない人がいます。

**だから**といって、全員のコンセンサスを得ることには無理があります。全員一致にこだわると、新しいものは生まれにくくなり、ありきたりで、魅力のないクラブになってしまうでしょう。時には「全員参加」、「全員一致」でない方が良いのではないのでしょうか。

クラブの目的については、程度の差こそあれ、みな知って入会しています。目的は抽象的な表現ですから、はっきりしないところがありますが、かえって一致しやすいでしょう。むしろ、目的を達成するための核となる手段、それを補強する手段については、具体的なだけに、個人によって思いが分かれます。

また、手段が目的化してしまっていることもあります。近年、集会やイベントが、ものすごく多くなっています。それぞれに意味も狙いもあるのですから、参加してみると、思いがけない収穫を得られることが、ままあります。しかし、基本的

には、手段については、全員が参加する必須科目と、自由参加の選択科目を明らかにしておいた方が良いのではないかと思います。

### 一致する部分と、しない部分

最近、クラブからいただいたブリテンをご紹介します。

甲府クラブは、横浜国際大会以後、カーボンオフセットをクラブとして取り上げています。

ブリテン(2010年11月号)によりますと、例会場への車の乗り入れ制限を始めました。これまで会員42人中、車利用者は35人ほどありました。これを相乗りにして、車を10台くらいに絞り、徒歩や自転車利用を勧めました。10月の例会は、出席者29人中、車利用5人、徒歩15人、自転車8人、相乗り1人となりました。このために自転車を購入したメンバーもいたそうです。これなどは、メンバー全員で参加できるプログラムだと思います。

逆に、2006年から、メンバーが農地を提供して「ワイズ農園」を始めています。メンバーが農作業を行い、YMCAの幼児たちが芋掘りをしたり、収穫物で料理会を開いたり、バザーで販売したりしています。しかし、肉体労働ですから、全員が参加するには無理があります。また農作業は人間の都合ではなく、野菜の成長に合わせて仕事をしなくてはなりません。週日の早朝あるいは休日に来られる人は限られてしまうのです。もし、全員参加を前提としたら、この健康的、教育的、親睦的なプログラムを立ち上げることは、難しかったと思います。

熱海グローリークラブのブリテン(2010年9月号)には、年間のメンバーの例会出席率一覧表が掲載されています。なんと、広義会員を除くメンバー全員の32人が出席率100%でした。当然、月別でも100%、表の縦横がすべて100%なのです。熱海市だけが、ワイズメンにとってよい環境であるはずはありません。メンバー全員が、お互いが大切にしていることのために闘っているの

だと、頭が下がる思いです。

一方、同じ頁には「俳句コーナー」があり、13人のメンバー・メネットが作品を発表し、楽しんでます。

2つのクラブは、ともに、必須科目と選択科目のメリハリがあるように感じます。多分、どこのクラブでも、多かれ少なかれ、これを使い分けているのでしょう。

### 選択科目のルール

選択科目については、自分が判断することが大切です。「あの人はどうなんですか?」と問うのではなく、「自分は、どうなのか?」です。

選択科目には、クラブの中で、ゆるやかな了解事項があって良いと思います。たとえば、

やりたい人が、やりたいことを、やりたいときにやる。

やりたい人が手を挙げて、参加したい人を募る(この指とまれ方式)

やりたいことは、クラブの承認をとる。

メンバー全員に声を掛けて、誘う。(ブリテンなどで、オープンにする)

メンバー全員に報告する。(ブリテンなどで、オープンにする)

途中からでも参加できるようにする。

参加しない人を批判しない。

手を挙げた人は責任をもつ。

なんらかの事情で継続できない場合は、会長に報告する。

誰かが手を挙げたら、すかさず「私も!」と、フォローがある場合と、「あの人がやるのだから、まかせよう」と、皆が退いてしまう場合があります。後者の場合は、しばしば問題になります。しばらくして、一向に進捗していなことに、周囲が気づいていても、なかなか聞きづらいのです。結局は、どたん場で問題が残って、人間関係がぎくしゃくすることになりかねません。

リーダーは、最初から委員を複数にするとか、常に進行状況を確認する必要があります。

## 必須科目のルール

必須科目については、クラブによって、あるいは年度によって違いがあるでしょう。基本的には次の事柄は、全員が意識して、参加しないと、クラブは成り立ちません。

- 会費を納入すること
- 例会出席に努力すること
- 問い合わせには返答すること
- 決められた役割は、果たすこと

## クラブの中に小さな嵐を

クラブメンバー全員が、どんな場面でも一丸となるのは、難しいし、また、その必要もないと申しました。

しかし、クラブの外にあっては、社会においても家庭においても力を発揮している方が、寝続けているというのは、クラブにとっても、ご本人にとっても、もったいないことです。

そのためには、状況の変化が必要なのかも知れませんが。冒頭に書きました名古屋東海クラブのように新クラブ設立を図ることも、ひとつのチャンスでしょう。さまざまな形で、クラブ内に嵐や地震を起して、仕組みを壊したり、ずらしたりすることも必要かもしれません。

通常の例会とは変化をつけた例会をもったり、イベント行うということにも、そういった意味もあるように思います。

## 忘れられないヒトコト

あるメンバーが、「私がこんなに苦労しているのに、誰も協力してくれない」と思わず、ぼやいたことがありました。気の置けない間柄の塩入淑子さん(東京グリーン・メネット)は、すかさず、「そう思った時は、あなた、働き過ぎなのよ」。

## あとがき

横浜国際大会では、プログラム委員に加えていただきました。委員は、20人でした。2年余にわたる作業でした。委員会の開催日時は全員に相

談して決めるわけではありませんから、大会までの委員会で、全員が出席したことは、1回もありませんでした。出席予定の委員でも、会の始まる時点では不揃いでした。4日間の大会中でも、全員が顔を揃えた瞬間が一度もありませんでした。

大会が終わって、1カ月ほどして、ささやかな打ち上げ会をやりました。この時も、数人が集まれませんでしたが。ひとり一人の苦労話を聞き、参加できなかったひとり一人の活躍を思い浮かべていましたら、委員のだれ一人が欠けても、あの大会でのプログラム委員会の責任は果たせなかったと思えて、幸せな気分になりました。

「全員参加」「全員一致」ということは、同じ時間に同じ場所にいなくてもよいのだと思いました。

東京目黒クラブにおられた故野畑幸平さんは、家業の印刷業を営んでいました。経営の実権はお父さんから譲られてはいない様子でした。

この野畑さんから、夜11時になるとしばしば電話がありました。多分、夜の仕事を終え、メネットとビールを軽く飲み、その後、お父さんがいない仕事場で、儲からないワイズやYMCAの仕事に取り掛かる算段をしていたのでしょう。

本当にワイズのことをよく話されました。例会のこと、食事のこと、BFのこと、家族キャンプのこと、新メンバーのこと、ブリテンのこと。

彼は、いつでもワイズのことを考えて、備えていました。印刷の断ち落しの端紙を、ワイズのために捨てないでいました。ですから、東京目黒クラブの印刷物は、ちょっとしたものでも超豪華紙ということがありました。

その野畑さんが、かつては所属した横浜クラブでは、まさにスリーピングメンバー。例会日には仲間が車で迎えに行き、連れてきたという、信じられない話を数人から聞きました。

人はいつまでも、眠り続けてはいないのだと思いました。

また、今、休んでいる人がいるから、自分の順番があるということも厳然とした事実なのです。